



工藤美代子

ア
ニ
メ
シ
ク

ラフカディオ・ハーン追想

熱帯紀行

■著者略歴

工藤美代子 (くどう・みよこ)

ノンフィクション作家。1950年東京生まれ。1968年大妻女子高校卒業後チェコスロバキアのカレル大学留学。1973年カナダに移住。1979年バンクーバー、コロンビア・カレッジ卒業。1991年『工藤写真館の昭和』(講談社文庫)で講談社ノンフィクション賞受賞。1993年より東京在住。

著書：『悲劇の外交官 ハーバート・ノーマンの生涯』(岩波書店)，『一人さみしき双葉山』(ちくま文庫)，『カラコルムの風』(扶桑社)，『寂しき声 西脇順三郎の生涯』(筑摩書房)，『哀しい目つきの漂流者』(集英社文庫) ほか。



マルティニーク熱帯紀行

一九九五年十月二十日 第一版第一刷発行

著 者 工 藤 美代子

発行者 池 田 郁 雄

発行所 株式会社 恒 文 社

〒101 東京都千代田区三崎町三ー一〇ー一〇

電話 〇三ー三三三八ー〇一八一 (販売部)

〇三ー三三三八ー〇一六四 (出版部)

振替口座 〇〇一五〇ー〇一三五八二四

印刷・製本 共同印刷株式会社

落丁・乱丁本は、お取りかえいたします。
定価は、カバーに表示してあります。

©Miyoiko KUDO 1995. Printed in Japan
ISBN4-7704-0847-1 C0095

目

次

サンファン行きの乗客たち 7

道端の聖母マリア像 17

「岩の聖者」サン・ピエールの町へ 27

美人族 53

グランド・アーンズ 75

ジョゼフィーヌ像 95

マドラス・チェックのターバン 115

大噴火の爪あと 137

親愛なるボロへ…… 155

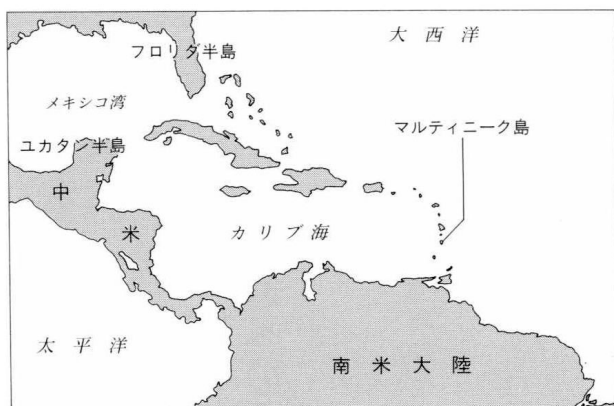
仮面の世界 167

ホテルにて 179

フォール・ド・フランス 191

「竜宮城への夢」の原点として 209

あとがき 225



マルティニーク熱帯紀行



ラフカディオ・ハーン追想

本文写真——宇佐美
博幸
装丁——本田
進

サンファン行きの乗客たち

さすがに少し心配になったのは、アメリカン航空のサンファン行きチェックイン・カウンターに並んだときだった。

あれは一九九二年六月の最後の日。ニューヨークのJFK空港だ。最終目的地はサンファンではない。そもそも私は、サンファンがプエルトリコの首都であることさえ知らなかった。とにかく、サンファンで乗り換えて、最終的にはマルティニーク島のフォールド・フランスに着くつもりだった。

それにしても、カウンターの前に並ぶ人びとは、私の目には異様に見えた。白人は少ない。ほとんどが黒人だった。原色の鮮やかな服を着て、金のアクセサリーをジャラジャラと、文字通り音がするほど、たくさんぶら下げている。話している言葉は英語ではないよ

うだ。動作がとてもゆつくりとしている。目は左右を見ないで、五、六メートル先をぼんやり眺めている。髪の毛を二十センチくらいの高さにお団子のように結い上げた女性が、何人もいた。そうだ、彼らには彼らのファッションがあるのだと、ここで、はつと気がつく。それを知らない私は、不思議な人びとの集団に紛れ込んだ気がしたのだ。

この人たちはプエルトリコへ帰るのだろうか、それとも行くのだろうか……と、とりとめもなく考える。どちらにせよ、プエルトリコにルーツのある人びとなのは確かだ。

チェックインは時間がかかった。なぜかカウンターで、航空会社の職員と乗客が声高にやりあっている。トラブルにつぐトラブルで、列はなかなか進まない。多分、彼らには彼らのファッションがあるように、彼らには彼らのロジックがあつて、白人の職員のそれとうまく折り合わないのだろう。

私はどこか遠い国の長い葬列に迷い込み、知らない墓地に連れてゆかれるような、奇妙な気分になつてきた。まだニューヨークにいるというのに、カウンターの前はすでにもう異界だ。

ようやくチェックインして、空港の待合室に行く。ここですら、やはり、いつも知っている待合室の光景とはどこか違う。乗客は落着いて椅子に座っていない。フラフラとひどく緩慢に歩いたり、立ち止まったりしては、ペチャクチャ喋っている。

待合室の中に流れる時間とは、たいがいの場合、静止した映像のようなものだ。みんなペーパー・バックの本でも読みながら、じっと時間が消化されてゆくのを待っている。だが、サンファン行きの便の乗客は、まるで自分がここで飛行機を待つという目的があることなど眼中にないように、勝手に歩きまわっていた。

時間が来て、搭乗手続きが開始されたのだが、すぐに搭乗口まで行った客は少なかった。ちようどスローモーションのビデオのように、ほとんどの乗客がのんびりとお喋りを続けながら、少しずつ搭乗口へ向かう。

気の短い私は、さっさと飛行機に乗り込んで、自分の座席番号をみつけ腰をおろす。疲れとともに、怒りがどつと込み上げてくる。その前日に、私はニューヨークの「コスモポリタン」誌の編集部に行った。かつてラフカディオ・ハーンがこの雑誌に寄稿していた。それで、一世紀前のバックナンバーを見せてもらうためだった。

昔の「コスモポリタン」は文芸誌だったが、今は完全に路線を変更している。ファッション、セックス、ゴシップ関係の記事を満載した女性向け大衆誌になっている。

廊下の途中の本棚にバックナンバーは並んでいた。紹介者があって訪ねて、閲覧の許可も得ていたのだが、編集部の人露骨に嫌な顔をした。

最新流行のスーツに身をつつみ、肩をそびやかすようにして歩く女性編集者たちは、金

属的な声を出す。

「バックナンバーを見てもいいけど、ロビーの椅子には座らないでね。邪魔になるから廊下立ってないでよ。読む場所？ そんなのないわよ。コピーを取りたいの？ みんなが使っている機械だから、二枚ならいいけど、それ以上はダメよ。どいて、どいて、廊下にいたら急ぐ人の迷惑でしょ。忙しいのよ、みんな」

それでもねばって一時間ほどはリサーチをした。私は北京で買った安物の絹のスカートにTシャツを着ていた。デザイナーズ・ブランドの洋服を着た女性たちの間では、ひどく場違いに見えただろう。彼女たちが隠そうともせず軽蔑の視線を私に向けたのは、私のみすばらしい服装のせいか、東洋人のせいか、あるいは下手な英語のせいか、それともその全部のせいだったろうか。

やれやれ……と、怒りが嘆きに変わりかけたところで、顔を上げて機内を見まわした私は、ふたたび奇妙な感じにとらわれる。乗客が通路を行ったり来たりしていた。途中で立ち止まり、大声で喋り散らして、ゲラゲラ笑う。無重力地帯を歩くように、のんびりと人間が動く。

私は腕時計を見た。そろそろ出発時間が迫っているはずだ。それなのに席は三分の二も埋まっていない。いったい彼らはいつになったら着席するつもりなのだろう。案じていたところへアナウンスが流れる。

「乗客の皆様、御着席ください。さもないと当機は定刻通りにJFK（ケネディ）空港を離陸できません」

わざと緊張感を含んだような男の人の声だった。それでも乗客は知らん顔である。同じアナウンスが三回繰り返されたところで、ようやく極彩色のドレスをまとった人びとは、少しもあわてない様子で座席に座った。

「面白いねえ、あなたこういうの大好きでしょう？　あなただったら上手に書くでしょうね」

私は自分の連れに、心の中で話しかける。およそ西洋的な常識にとらわれることのなかったラフカディオ・ハーンは、むしろ西洋以外の場所に幸福を見出した人だった。今から約一世紀ほど前に、ハーンはニューヨークを去ってマルティニーク島へ向かった。そして、今回の私の旅行の目的は、そのハーンの足跡をたどってみることにあった。知らぬ間に、私はいつもハーンに話しかけていた。「コスモポリタン」の編集部を去るときも、

「これがあなたは嫌だったんでしょね。ニューヨークの人間の、この高慢ちきなところ

が」

摩天楼のそびえるオフィス街を歩きながら、私はハーンに話しかけ、同意を求めているのだった。

「巨大な鉄の嵐の吹きまくる世界」と、ハーンはニューヨークを形容した。そしてマルティニーク島のサン・ピエールを、「変わった、気紛れな、色彩豊かな、この小さな町」と愛情を込めて書いた。

初めの不安は少しずつ消えてきた。人間が時間をより能率的に使うために発明された飛行機という乗り物の中で、およそ時間に無関心な人びとと一緒に小さな南の島に向かう。「でもねえ、あなたはまだ三十代だったもの。いいわよ。そして私の年には、すでに日本でちゃんと所帯を持っていた。放浪の生活から足を洗っていた。そう考えると、マルティニーク島があなたにとっては最後の放浪地だった。日本はもう旅の途中じゃなくて、定住地になったわけだから……」

四十二歳という自分の年齢を思い出すと、ふうつとため息が出る。

自分が何をしたいのか、はつきりとわかっています。——老いぼれて、ぼけて白髪になって死ぬまで、あちこちを永遠にさまようこと——ただただ好きなところをさすらっ

て、自分を自分だけにゆだね、誰をもわずらわさないことです。しかし、それはできないことです。

(関田かおる訳)

一八七八年にハーンがニューオリンズから、父親代りとも言えるワトキンに書き送った手紙の一節だ。彼と同じ願いは、現在でも多くの人が持っているから、ハーン作品は愛されて、その研究書や伝記も定期的に出版され続けている。

飛行機は定刻より少し遅れてサンファンの飛行場に到着した。原色にゴールドを巻いた人びとが、異常に多い手荷物を持って、その上に子供の手を引いて飛行機を降りる。少しも急がずあわてず、しかし騒々しく無秩序にロビーに散ってゆく。

慣れなければ……と、私は独りでつぶやく。マルティニークには十日間滞在予定だ。ほとんど予備知識はない。ハーンが百年以上も昔に書いた世界がそのまま残っているはずがないのは、日本を見たつてはつきりわかる。ハーンが愛した日本なんて、よほどラッキーなチャンスに恵まれない限りお目に掛かれない。

とにかく、飛行機の中の乗客を見た限り、日本はおろかアメリカやヨーロッパの常識も通じないようだ。旅行者としての不便は、前もって覚悟しておいたほうが良いだろう。身の危険さえなければ文句は言うまい。少なくともマルティニーク島では、北京で調達したペラペラのスカートをはいていても、誰も馬鹿にする人はいないだろう。

サンファンからマルティニーク島行きの飛行機の出発は二時間近く遅れたので、フォー・ド・フランスに着いたのは真夜中の十二時をまわっていた。

信じられないことだが、日本で予約できるこの町のホテルは二軒しかなかった。いつも頼んでいる大手の旅行社でさえ、ほとんど情報がなかった。私は安いほうのホテルを二泊だけ予約しておいた。安いといっても、一泊二万五千円くらいする。そんなところへ十日間も泊まるわけにはゆかない。

面白かったのは、サンファン発の飛行機では、客種がまるで変わってしまったことだった。白人が多かった。それも裕福そうな人びとである。マルティニーク島はリゾート地だから、遊びに行く人たちがしらと私は考えていた。

この推測は正しかった。午前一時に到着したホテルは、海辺にあり、いかにもリゾート地らしくパステル・カラーの建物が並び、海岸はプライベート・ビーチ。レストランは四、五軒ありそうだった。ハワイのリゾート・ホテルによく似た雰囲気だ。